

で奇蹟的にめぐり会い、その父の姿たるやボロボロの服にリュック一つを背負っていました。天津から船に乗り、鉄板の上に毛布一枚敷いただけで内地へ帰ることの喜びをかみしめていました。長い長い列を作り乗船し、母の背から子どもをおろしたとき、子どもはすでに死亡していました。ある悲しそうな母親の顔が四十五年たった今でも私の脳裏にやきついていきます。昭和二十一年二月、佐世保に上陸。DDTを頭の前から足の先までふきかけられ、みんなそれぞれの郷里へ向かいました。父は四十二歳、妻と私達子ども四人をかかえて生きてゆかねばならない。父が今まででどれだけ心身共に苦勞に苦勞を重ね、たえがきたを耐えて生きてこられたかを私は見ている。(言葉では表しようがない)現在では電気工事店で生活を支えています。父は現在八十七歳で眼底出血、私(五十六歳)が代筆しました。

大連十八年、北京一年の青春

大阪府 青木 彌生

昭和二十年八月十五日正午、北京西城第一国民学校四年女子組の子どもたちとラジオの前で起立して終戦の詔勅。内容がつかめず、教師たちが集合して、戦争終結が理解でき、みんなで、ぼう然として泣いていた。ここは天安門のすぐ傍で、日本人子女千二百人ほどの学習の場であった。

ポツダム宣言受諾、無条件降伏となれば、今後どうなるか、不安はかくせず、勝つことを信じて今日まできたのだからなおさらだった。

玄関の所で日本の若い憲兵が号泣しているのを見たのが今も印象に残っている。学校から徒歩で四十分の所の延年胡同という街に、華北交通の杜宅があって、塀が高く、厳重な警戒の中での生活となった。学校へは残務整理のために出勤し、毎日は、校内外の整備や書類の焼却

など、とてもたいへんであった。通う道が今までとちがって用心深く、中国の服を来て黙々と歩いた。

私は二歳のときに、大阪から渡満し、大連での暮らしが始まり、小学校、女学校、師範学校を大連、旅順で学び、大陸的にのんびり平和な時代を過ごしたが、だんだんと世の中のようにすが緊迫してきたことを感じるようになった。

父は大連中央試験所に勤務し、十五年頃より、北京へ転勤し、母と子どもたちだけとなった。六人の姉弟の長女として、家族の世話をさせられたが、十八年二月下の妹が病死し、ついで弟が中学二年から予科練へ入隊して行き、心細くなった。母は北京へ移ると言い出した。わたしはそのとき、金州小学校へつとめていたので、親と別れ、下宿して一年間を終り、二十年四月より北京へ出向させて貰い、全家族が揃っての生活が始まったら、四か月後終戦。金州での別れの悲しみが、幸運へとかわったこと（戦後の混乱を親と共にした）運命のふしぎさだ。まちは表面は平静であったが、中国人たちは日本語を話さなくなって困ることも多かった。

高々と星条旗がはためき、日の丸は見えなくなってしまい、国が敗れたことを痛感したが、蒋介石総統のお陰で、安全の保障がされて、暴動もあまりなく、後で八路軍の進入はあったが、危害は少なくすんだ。

学校の接收完了、周辺の親たちの要求で、塾を開設することになり、五十人ほどの子弟の教育をし、帰国後の学力の差が無いよう努力をした。父が残留して仕事を続けたので、食糧の配給もあって、生活は困らなかった。

引揚げ開始、各地での集結、荷造り、家の後始末等、雑事に追われる毎日だった。

大連十八年、北京は一年の期間、居住したが、父の残留も終り、家族六人、大勢の人びととトラックや貨車に乗せられ、天津へむかう。ここの収容所に一泊、タンクから乗船した。乗船名簿作成の手伝いをした。手続き上のトラブルから乗船できない人もあった。二千人の同胞とLST上陸用舟艇で故国へむかい、一週間佐世保へ上陸。検疫を受けて列車が大阪へむかった。二十一年五月に帰国したが、まるで昨日のことに思われる。